



保護者が保育所に求める食育ニーズの検討

著者	宮本 啓子
著者別名	MIYAMOTO Keiko
雑誌名	神戸松蔭女子学院大学研究紀要. 人間科学部篇
号	6
ページ	79-90
発行年	2017-03-05
URL	http://doi.org/10.14946/00001975

保護者が保育所に求める食育ニーズの検討

宮本 啓子

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: marluna@shoin.ac.jp

Consideration of food education needs that parents ask for nurseries

MIYAMOTO Keiko

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本調査では、食育プログラムの作成と実践を行うために、子どもを保育所に預ける保護者の食育ニーズを把握し、加えて、保護者の食育ニーズは、「子ども1人」か、「きょうだいがいる」という条件によって、差異があるかどうかを把握することとした。神戸市にある保育所を利用する100世帯を対象に、無記名自記式調査票を用いたアンケート調査を行った。回収率51%であった。

2群で大きな有意差は見られなかったが、「きょうだいがいる」2人以上の子どもの保護者は子育ての経験が豊富であり、食育に対する認知度も高く、経験も積んでいると見られた。それに対し、「子ども1人」の者は食品や食生活の知識や技術の学ぶ場への参加希望が多かった。保護者が食生活についての知識や技術への興味があり、食育に対するニーズは高いことがうかがえる。この結果から、初めての子育て中の保護者には、専門職による決め細やかな支援が重要である。今後はさらに保護者の食育へのニーズを踏まえて、保育所で行っている食育の現状を把握し、食育ニーズとのマッチングを検討し、実効性のある食育プログラムに取り組んでいくことが必要と考える。

The purpose of this study was to grasp the dietary education (Shokuiku) needs of parents who leave their children to kindergarten for the creation and practice of dietary education program. In addition, we decided whether parents' dietary education needs are different by "an only child" or "two or more children". We conducted a questionnaire survey using bearer self-record questionnaires for 100 households using a kindergarten in Kobe City. The recovery rate was 51%.

There are not significant differences between the dietary education needs of one child's parents and the dietary education needs of parents of "two or more children". Parents who are raising two or

more parents are rich in parenting experience, high awareness of food education, and inferred that they have experience. Those who were “an only child” wanted to participate in a place to learn knowledge and skills of food and eating habits. It seems that parents are interested in knowledge and skills on dietary life, and the needs for food education are high.

Based on that, for parents with poor child rearing experience, professionals such as dietician s need to make detailed advice and food education support.

キーワード：食育、子育て支援、食事作り、食生活、

Key Words: food education, Child rearing support, cooking, eating habits

1. はじめに

平成 17 年（2005 年）に食育基本法が施行され、10 年が経過した。食育基本法では、食育は生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けている。平成 28 年（2016 年）3 月に作成された第 3 次食育推進基本計画（内閣府、2016）は、「実践の環を広げよう」をテーマに、「生涯にわたる食の営み」と「生産から食卓までの食べ物の循環」にも目を向け、食育を全てのライフステージを対象に行うことをコンセプトにしている。その生涯にわたる食の営みの中で、幼児期に形成する食習慣や食嗜好は青年期まで続くという報告（Coulthard H・Harris G・Emmett P、2010）もあり、食育基本法においても「子どもたちに対する食育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼす」として、重要視している。

幼児期の子どもへの食育の取り組みとしては、保育所や幼稚園において行事食・郷土食の提供や料理教室、野菜栽培など様々な活動がなされている（上杉・稲葉、2016）（中津・長坂、2016）（鈴木、2016）。これらは子どもを対象としたものが多いが、乳幼児栄養調査／厚生労働省（2005、2015）では、保護者の朝食習慣に欠食がある場合には、子どもにも欠食の傾向があることが報告され、幼児期の幼い子どもの食生活には、保護者の生活上の食の位置づけや食行動の影響を受けることも明らかになっている（山口・春木・原田、1996）（大木・稲山・坂本、2003）。

一方、平成 27 年度国民生活基礎調査（厚生労働省、2015）によると、児童が「1 人」いる世帯は児童のいる世帯の 46.4%、「2 人」いる世帯は児童のいる世帯の 40.4%で、合計 86.4%の世帯が子どもが 1 人または 2 人の世帯であり、少子化を反映している。また少子化ではあるが、夫婦と未婚の子の組み合わせの核家族化は進行しており、共働きの増加に伴い、夫婦（保護者）が子育てにかけられる時間は減少している。

そのため、厚生労働省による「保育所における食事の提供ガイドライン」（厚生労働省、2012）においては「子どもの食事のみならず、母親も含めた家族全体の食事の支援が必要」と述べられている。生活の多様化に伴い、支援する側においては保護者の食育ニーズを把握した、きめ細やかな対応が重要と考えられる。

そこで本調査においては、子育ての当事者支援のための食育プログラムの作成と実践に示

唆を得ることを狙いとし、子どもを保育所に預ける保護者の食育ニーズの把握、子どもの数などの属性によって保護者が保育所に求める食育ニーズに変化があるかどうかを把握することとした。

2. 研究方法

2.1. 調査対象および調査項目

神戸市内の保育所1園を利用する100世帯の保護者を対象に、無記名自記式の調査票を配布し、留め置き方式で回収した。配布に当たっては調査者から保育所に勤務する保育士に対して、調査票の目的と内容を説明し、配布を依頼した。

調査票は、先行調査（厚生労働省、2012）を参考にして作成し、項目数は21項目であった。調査内容の構成は、子どもの数と保育所利用状況について（2項目）、食育の必要と食育の内容について（7項目）、家庭での食生活について（6項目）、子育てについて（1項目）、食に関して学習したいこと（2項目）、回答者の基本属性（2項目）、自由記入欄（1項目）である。

回収したデータは、Microsoft Excel 2010 および IBM SPSS Statistics for Windows バージョン18を用いて集計・解析を行った。子どもの数による差異を検討するために「子ども1人」群と「きょうだいあり」群にわけて解析を行った。解析は χ^2 乗検定又はフィッシャーの正確確率検定の後に残差分析を行った。有意水準は5%とした。

調査票は全て番号化処理を行い、解析に使用した。調査は全て保育所に従事する職員を仲介者として行われ、調査者と保護者が直接に対面することなく、個人情報に関する情報の保護に努めた。調査期間は平成24年9月18日～28日であった。

3. 結果

3.1. 調査対象者の属性

配布数100件に対し、回答件数は51件（回収率51%）、有効回答率は100%であった。回答者の内訳は、50名が母親で平均年齢は36.8歳（標準偏差 \pm 4歳）、男性は1名（続柄は父親）で年齢は39歳であった（表1）。

年代別に20代は3名（5.9%）、30代は38名（74.5%）、40代は10名（19.6%）であり、30代が最も多かった。子どもの数について、第1子のみの世帯は19件、子ども2人の世帯は28件、子ども3人の世帯は3件、子ども4人の世帯は1件であり、子ども2人の世帯が最も多かった（表2）。保護者の年齢と子どもの数による有意差は見られなかった。

保育所に預けている子どもは第何子かを尋ねたところ、子どもが第1子のみの19世帯は全て、保育所を利用中であった。子ども2人の28世帯は、第1子が保育所利用中13件、第2子が保育所利用中22件であった。第1子と第2子を保育所に預けている世帯が7件あると考えられる。子ども3人の3世帯は、第1子が保育所利用中1件、第2子が保育所利用中2件、第3子が保育所利用中3件で、子ども3人のうち2人を保育所に預けている世帯が3件あると考えられる。子ども4人の1世帯は、第2子が保育所利用中1件であった（表2）。

表 1. 保護者の基本属性

	総数 (n=51)	男性 (n=1)	女性 (n=50)
回答件数 (n, %)	51	1 (2.0)	50 (98.0)
平均±標準偏差 (歳)	36.08	39	36.8±4.0
最大値/最小値 (歳)	25 / 45	-	25 / 45
子どもとの続柄	-	父親	母親

表 2. 子どもの数および保育所利用状況 (n, %)

	総数 (n=51)	子ども 1 人 (n=19)	子ども 2 人 (n=28)	子ども 3 人 (n=3)	子ども 4 人 (n=1)
20 代	3 (5.9)	2 (10.5)	1 (3.6)	0 (0)	0 (0)
30 代	38 (74.5)	15 (78.9)	21 (75.0)	2 (66.7)	0 (0)
40 代	10 (19.6)	2 (10.5)	6 (21.4)	1 (33.3)	1 (100)
	(n=61)	(n=19)	(n=35)	(n=6)	(n=1)
第 1 子保育所利用中	33 (54.1)	19 (100)	13 (37.1)	1 (16.7)	0
第 2 子保育所利用中	25 (41.0)	0	22 (62.9)	2 (33.3)	1 (100)
第 3 子保育所利用中	3 (4.9)	0	0	3 (50.0)	0
第 4 子保育所利用中	0	0	0	0	0

3.2. 「食育」の周知度

「食育」という言葉やその意味を知っていたか聞いたところ、「言葉は聞いたことがあり、意味も知っている」を選択した者の割合が 80.4% (n=41)、「言葉は聞いたことがあるが、意味は知らない」を選択した者の割合は 17.6% (n=9)、「聞いたことがないし、意味も知らない」者の割合は 2% (n=1) であった。「食育」という言葉の周知度は、「子ども 1 人」の者と「きょうだいあり」の者とは有意差は見られなかった (表 3)。

「食べること」について学習が必要か聞いたところ、「学習は必要」と答えた者の割合は回答者全て 100% (n=51) であった (表 4)。

「食べること」の学習 (= 「食育」) は、「だれ」にとって必要だと思うかを、複数回答可で選択肢から選んで貰った (表 4)。総回答数 155 件のうち、最も多かったのは、食育が必要なのは、「自分の子ども」 23.9% (n=37) であった。次いで「自分自身」 22.6% (n=35) で、「配偶者」と「保育に関係しない人も含め全ての人」が 16.1% (n=25) の同率であった。最も少なかったのは、保育に携わる専門職 9.0% (n=14) であった。「自分自身」と回答した者の割

表 3. 「食育」の周知度 (n, %)

	総数 (n=51)	子ども 1 人 (n=19)	きょうだいあり (n=32)	p 値
Q. あなたは、「食育」という言葉を聞いたことがありますか。またその意味をご存知ですか。				
(1) 言葉は聞いたことがあり、意味も知っている	41 (80.4)	14 (73.7)	27 (84.4)	
(2) 言葉は聞いたことがあるが、意味は知らない	9 (17.6)	4 (21.1)	5 (15.6)	0.434
(3) 聞いたことがないし、意味も知らない	1 (2.0)	1 (5.3)	0 (0)	

表 4. 食育の必要性 (n, %)

	総数 (n=51)	子ども 1 人 (n=19)	きょうだいあり (n=31)	p 値
Q. 「読み、書き、計算」は、学習の基礎と言われる。「食べること」も、それらと同様に学習 (= 「食育」) が必要だと思うか。				
(1) 学習は必要	51 (100)	19 (37.3)	32 (62.7)	-
(2) 学習は不要	0 (0)	0 (0)	0 (0)	

Q. 「食べること」の学習 (= 「食育」) は、「だれ」にとって必要だと思うか。(複数回答可)

	(n=155)	(n=53)	(n=102)	p 値
(1) 自分自身	35 (22.6)	10 (28.6)	25 (71.4)	0.056
(2) 配偶者	25 (16.1)	8 (32.0)	17 (68.0)	0.561
(3) 自分の子ども	37 (23.9)	12 (32.4)	25 (67.6)	0.199
(4) 保育に携わる専門職	14 (9.0)	5 (35.7)	9 (64.3)	1.000
(5) 保育に関係する人なら誰でも	19 (12.3)	6 (31.6)	13 (68.4)	0.556
(6) 保育に関係しない人も含め全ての人	25 (16.1)	12 (48.0)	13 (52.0)	0.244

合は、「子ども1人」の者より、「きょうだいあり」の回答者の割合のほうが高い傾向にあった。
($\chi^2=4.402$ 、自由度 1、 $p=0.056$)

3.3. 保育所で行う食育

保育所で「食育」を行ったほうが良いと思うかを尋ねたところ、「保育所で食育を行ったほうが良い」を選択した割合が98% (n=50) で、「保育所で食育を行わなくて良い」の割合は2% (n=1) であった (表4)。

保育所での食育の必要性の回答を選択した理由を自由記述で尋ねたところ、「必要である」と回答したケースでは、「基本は家庭内で行いたい、働いていると時間がなかなか取れないので平日の大半を過ごす保育所でして欲しい」、「みんな (お友達、先生) でワイワイ他の意見も聞きながら楽しくできるから」、「友達が食べているなどの刺激は子どもにプラスに働くから」等という理由であった。「必要でない」を選択したケース (n=1) は、「食育は家庭で行うべき事だから、保育所では食育は必要ない」という理由だった。

保育所で行ったほうがよいと思う「食育」の内容を選択肢から複数回答可で選んでもらっ

表5. 保育所での食育について (n, %)

	総数 (n=51)	子ども1人 (n=19)	きょうだいあり (n=32)	p 値
--	--------------	-----------------	-------------------	-----

Q. あなたは、保育所#で「食育」を行ったほうが良いと思いますか。

それとも行わなくて良いと思いますか。(複数回答可)

#この場合の「保育所」は特定の保育所ではなく、一般名詞の「保育所」です。

保育所で食育を行ったほうが良い	50 (98.0)	18 (36.0)	32 (64.0)	—
保育所で食育を行わなくて良い	1 (2.0)	1 (2.0)	0 (0)	

Q. 保育所で行ったほうがよいと思う「食育」の内容。(複数回答可)

	(n=150)	(n=42)	(n=105)	p 値
(1) 農業体験	35 (23.0)	11 (31.4)	24 (68.6)	0.348
(2) 食事作り	37 (25.0)	9 (24.3)	28 (75.7)	0.007 *
(3) 栄養 (素) の学習	19 (13.0)	5 (26.3)	14 (73.7)	0.366
(4) 食品の種類や特徴の学習	19 (13.0)	6 (31.6)	13 (68.4)	0.764
(5) 食事の挨拶やマナー	37 (25.0)	11 (29.7)	26 (70.3)	0.180

* $p<0.05$

た(表4)。総回答数150件のうち、「食事作り」と「食事の挨拶やマナー」を選択した割合が25% (n=37) と最も多かった。次いで「農業体験」23% (n=35)、「栄養(素)の学習」「食品の種類や特徴の学習」は13% (n=19)であった。「食事作り」と回答した者は、「子ども1人」の者より、「きょうだいあり」の回答者のほうが有意に高かった。 $(\chi^2=8.420$ 、自由度1、 $p<0.05$)

3.4. 子どもの食生活について

子どもの食生活について誰かに相談したいと思うかを尋ねたところ、「相談したいと思っていない」が41.2% (n=21) で最も多く、次いで「すでに相談している」35.3% (n=18)、「相談したいが相談する相手がない」19.6% (n=10) と続いた。無回答は3.9% (n=2) あった。

「相談したいが相談する相手がない」を選んだ者のうち、「きょうだいあり」の回答者の割合のほうが、「子ども1人」の者の割合より、有意に低く、「相談したいと思っていない」と回答した者の割合は、「きょうだいあり」の回答者の割合のほうが、「子ども1人」の者より有意に高かった。 $(\chi^2=7.725$ 、自由度3、 $p<0.05$)

また子どもの食生活で困っていることについて複数回答可で質問したところ、84件の回答があった。最も多かったのは「食欲にむらがある」25.0% (n=21)、次いで「遊び食べをする」17.9% (n=15)、「食べるのが遅い」11.9% (n=10)、「よく噛まない」11.9% (n=10)であった。「遊び食べをする」は、「子ども1人」の者の割合が、「きょうだいあり」の者よりも有意に高かった。 $(\chi^2=7.084$ 、自由度1、 $p<0.05$) また「食べるのが遅い」は、「きょうだいあり」の者のほうが、「子ども1人」の者よりも有意に高かった。 $(\chi^2=6.983$ 、自由度1、 $p<0.05$)

3.5. 保護者が子育てで優先度が高いと考えている項目

「子どもにとって特に優先度が高いと考えている項目」を複数回答可で選択してもらったところ、総回答数154件で、最も多かったのは、「健康や順調な発育」27.9% (n=43)であった。次いで「他者とのかかわり」14.3% (n=22)、「社会的マナー・しつけ」14.3% (n=22) が同率であった。以降、「子どもの情緒の安定」13.6% (n=21)、「遊ぶこと」13.0% (n=20)、「毎日の食事」12.3% (n=19)、「言葉の発達」4.5% (n=7) と続いた。

全ての項目において「子ども1人」の者と「きょうだいあり」の者の間に有意差は見られなかった。

3.6. 保護者が食生活について身につけたい知識や技術

「今後、ふだん食べる食品や食生活についてどのような知識や技術を身につけたいと思いますか」を複数回答可で尋ねたところ、総回答数152件中、最も多かったのは、「手早く作れる料理の作り方」21.1% (n=32)、次に「食事と健康に関する知識」18.4% (n=28)、「食品に含まれる栄養素の知識」17.1% (n=26)であった。

全ての項目において「子ども1人」の者と「きょうだいあり」の者の間に有意差は見られなかった。

表 6. 子どもの食生活において困っていること (n, %)

	総数 (n=51)	子ども 1 人 (n=19)	きょうだいあり (n=32)	p 値
Q. お子様の食生活について誰かに相談したいと思いますか。それとも相談したいと思いませんか。				
(1) すでに相談している	18 (35.3)	7 (38.9)	11 (61.1)	0.036
(2) 相談したいが相談する相手がいない	10 (19.6)	7 (70.0)	3 (30.0)	
(3) 相談したいと思っていない	21 (41.2)	4 (19.0)	17 (81.0)	
(4) 無回答	2 (3.9)	1 (50.0)	1 (50.0)	

Q. お子様の食生活で困っていることはありますか。(複数回答可)

	(n=84)	(n=34)	(n=50)	p 値
(1) 朝食をあまり食べない	7 (8.3)	2 (28.6)	5 (71.4)	0.691
(2) 夕食をあまり食べない	1 (1.2)	1 (100)	0 (0)	0.388
(3) 食欲にむらがある	21 (25.0)	9 (42.9)	12 (57.1)	0.768
(4) 小食	2 (2.4)	1 (50.0)	1 (50.0)	1.000
(5) 食べすぎる	6 (7.1)	3 (50.0)	3 (50.0)	0.665
(6) 遊び食べをする	15 (17.9)	10 (66.7)	5 (33.3)	0.012 *
(7) 好き嫌いが多い	5 (5.9)	1 (20.0)	4 (80.0)	0.636
(8) 早食い	2 (2.4)	1 (50.0)	1 (50.0)	1.000
(9) 食べるのが遅い	10 (11.9)	1 (10.0)	9 (90.0)	0.019 *
(10) よく噛まない	10 (11.9)	4 (40.0)	6 (60.0)	1.000
(11) 特にない	3 (3.6)	1 (33.3)	2 (66.7)	1.000
(12) 間食が多い	2 (3.4)	0 (0)	2 (100)	0.515

*p<0.05

4. 考察

食育という言葉の意味まで知る者は 80%で、これに言葉は聞いたことがある者を合わせると 97.6%となり、「食育」という言葉の周知度は高いと言える。また食べることについての学

表 7. 子育てにあたり、優先度が高いと考えている項目 (n, %)

	総数 (n=154)	子ども 1 人 (n=56)	きょうだいあり (n=98)	p 値
Q. 子育てにあたり、お子様にとって、特に優先度が高いと考えている項目。(複数回答可)				
(1) 健康や順調な発育	43 (27.9)	17 (39.5)	26 (60.5)	0.694
(2) 他者とのかわり	22 (14.3)	7 (31.8)	15 (68.2)	0.566
(3) 言葉の発達	7 (4.5)	2 (28.6)	5 (71.4)	0.623
(4) 遊ぶこと	20 (13.0)	8 (42.9)	12 (57.1)	0.774
(5) 子どもの情緒の安定	21 (13.6)	9 (42.9)	12 (57.1)	0.369
(6) 毎日の食事	19 (12.3)	8 (42.1)	11 (57.9)	0.765
(7) 社会的マナー・しつけ	22 (14.3)	5 (22.7)	17 (77.3)	0.083

表 8. 食品や食生活についてどのような知識や技術を身につけたいか。(n, %)

	総数 (n=152)	子ども 1 人 (n=56)	きょうだいあり (n=98)	p 値
Q. ふだん食べる食品や食生活についてどのような知識や技術を身につけたいと思うか。(複数回答可)				
(1) 食品に含まれる栄養素の知識	26 (17.1)	9 (34.6)	17 (65.4)	0.776
(2) 食事と健康の関係に関する知識	28 (18.4)	11 (39.3)	17 (60.7)	0.779
(3) 離乳食・幼児食の作り方	7 (4.6)	5 (71.4)	2 (28.6)	0.087
(4) 高齢者食の作り方	3 (2.0)	0 (0)	3 (100)	0.285
(5) 生活習慣病予防の知識	16 (10.5)	7 (43.8)	9 (56.3)	0.547
(6) 食品の安全性に関する知識	19 (12.5)	6 (31.6)	13 (68.4)	0.564
(7) 食品表示の知識	12 (7.9)	7 (58.3)	5 (41.7)	0.101
(8) 食物アレルギーの知識	9 (5.9)	6 (66.7)	3 (33.3)	0.062
(9) 手早く作れる料理の作り方	32 (21.1)	10 (47.4)	22 (31.3)	0.369
	総数 (n=51)	子ども 1 人 (n=19)	きょうだいあり (n=31)	p 値
Q. あなたは、上記で選択した内容を学ぶ機会があれば、参加を希望しますか。				
(1) 参加したい	42 (84.0)	18 (42.9)	24 (57.1)	0.134
(2) 参加したくない	8 (16.0)	1 (12.5)	7 (87.5)	

習が必要と答えた者は100%となった。第三次食育推進基本計画（内閣府、2016）では、食育に関心を持っている国民の割合の目標を90%以上としているが、「食育」という言葉を知らなくても語句の簡単な解説を添えるだけで周知を促進することが出来ることが明らかとなった。

食育を必要とするものは、子どもと自分自身であり、保護者には自らも食べることにについて学びたいという意向が伺える。

保育所で行ったほうがよいと思う「食育」として「食事作り」と「食事の挨拶やマナー」を上げる者が多かったのは、自由記述にも見られるように保育所における集団行動による教育効果への期待や自宅で教えるのが難しい行為であることが考えられる。特に「食事作り」を選択した者は、「子ども1人」の者より「きょうだいあり」の者のほうが有意に高かった。食事作り（調理）は、刃物や火器を使用し、衛生管理に配慮する必要がある（廣瀬・上田・堀畑・酒井、2012）（酒井・廣瀬、2012）ため、乳幼児を複数抱える保護者が自分で子どもに教えるのは負荷が高く、保育所へのニーズが高い項目であることが考えられる。「農業体験」を選択した者も多く、これは食ができるまでの第一次産業についての学習であり、第三次食育推進計画の「生産から食卓までの食べ物の循環」を体験し、食への感謝の気持ちを養うことにつながる取り組みである。しかしながら農業や園芸は道具や土地などの確保も必要になり、専門的知識も要する（鈴木、2016）。これらを鑑みると上位3項目については保護者自らの実施が難しく、集団行動への期待があるのではないかと推測される。

保護者が子どもの食生活について相談したいかと思う項目では、「子ども1人」の者は相談のニーズが、「きょうだいあり」の者より多かった。子どもの食生活で困っていることについて、「子ども1人」の者と「きょうだいあり」の者で有意差が見られたのは、「遊び食べをする」、「食べるのが遅い」である。「遊び食べ」は、「子ども1人」の者で困っている割合が高かったが、「遊び食べ」は、1歳後半から2歳にかけて多く見られるもので、発達が進むにつれ、安定していくことが多いとされている／厚生労働省（2007、2010）。「子ども1人」で初めての子どもである場合は、子どもの年齢が低いことが考えられ、そのため、「遊び食べ」を困っていると上げる保護者の割合が高いと見られる。また「食べるのが遅い」は、「きょうだいあり」の者で高かったが、これは乳幼児が複数いると、保護者の介助が追いつかずに時間がかかってしまうことや、子ども同士で遊んでしまうことなどが考えられる。このような成長・発達に伴って見られる行動に関する困りごとについては、保育所での見守りや専門職による保護者への助言が行われることが重要と考えられる。

食生活について身につけたい知識や技術で最も多かったのは、子どもの数に関係なく、「手早く作れる料理の作り方」であり、共働きで多忙である保護者のニーズが現れたものとなった。

有意差は見られなかったが、「きょうだいあり」の保護者は子育ての経験が豊富な分、食育に対する認知度も高く、経験も積んでいると見られた。それに対し、「子ども1人」の者は食品や食生活の知識や技術の学ぶ場への参加希望が多かった。食生活についての知識や技術への興味があり、食育に対するニーズは高いことがうかがえる。

以上より、子育て経験の有無により、保護者の食育に対するニーズが異なることが示唆さ

れた。それを踏まえ、初めての子育て中の保護者に対しては、食育ニーズを把握し、不安や疑問に対応できるような決め細やかな支援が重要である。

子どもに対して食育を行うことによって保護者の生活面や食事面での変化があったという報告（高尾・足立・松本・池本、2010）（砂見・多田・梶・二階堂・井上・大西・乳井・吉崎・横山・日田・川野、2012）があり、保育所等で行う食育は子どもから保護者までの健康面や食生活に影響を及ぼすことが示唆されている。今後はさらに保護者の食育へのニーズを踏まえて、保育所で行っている食育の現状を把握し、食育ニーズとのマッチングを検討し、実効性のある食育プログラムに取り組んでいくことが必要と考える。

5. 謝辞

本調査の円滑な実施にご協力いただきました保育所の先生方、保護者の皆様、集計等を行ってくれた中村絵美さん、富永彩友美さんの両氏に心から御礼を申し上げます。

6. 文献

上杉宰世、稲葉理恵子. 保育所における食育活動の現状と栄養士の関わり. 大妻女子大学家政系研究紀要 49、55-62、2013.3

大木 薫、稲山 貴代、坂本 元子. 幼児の肥満要因と母親の食意識・食行動の関連について. 栄養学雑誌 61 (5)、289-298、2003.10

Coulthard H, Harris G, Emmett P. Long-term consequences of early fruit and vegetable feeding practices in the United Kingdom. *Public Health Nutr.* 13 (12): 2044-51. 2010 Jun 8.

厚生労働省、乳幼児栄養調査（平成 17 年度（2005）、平成 27 年度（2015））、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/83-1c.html>、2016 年 12 月 1 日引用

厚生労働省、平成 27 年度国民生活基礎調査、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa15/>、2016 年 12 月 1 日引用

厚生労働省、保育所における食事の提供ガイドライン、平成 24 年（2012）3 月、<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/shokujiguide.pdf>、2016 年 12 月 1 日引用

厚生労働省、児童福祉施設における食事の提供ガイド - 児童福祉施設における食事の提供及び栄養管理に関する研究会報告書 - <参考> 授乳や食事について不安な時期と保護者への支援. http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0301-4b_12.pdf、2016 年 12 月 1 日引用

厚生労働省雇用均等・児童家庭局・母子保健課、「授乳・離乳の支援ガイド」の策定について、平成 19 年（2007）3 月 14 日、<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/03/s0314-17.html>、2016 年 12 月 1 日引用

酒井 治子、廣瀬 志保. 保育所の調理体験活動における衛生・安全マニュアルの検討 (2) -

衛生・安全面の配慮及び計画・記録等の実践状況調査から一. 東京家政学院大学紀要. 52. 121-130. 2012-08-31

砂見 綾香、多田 由紀、梶 忍、二階堂 邦子、井上 久美子、大西 芽衣、乳井 恵美、吉崎 貴大、横山 友里、日田 安寿美、川野 因. 幼稚園児および保護者に対する食育プログラムが両者の食生活に及ぼす影響. 日本食育学会誌. 6 (3). 265-272. 2012

鈴木秀子、福島県における幼稚園・保育所の食育の現状と課題：栽培活動について会津大学短期大学部研究年報 (73)、123-158、2016.3.

高尾 優、足立 奈緒子、松本 麻衣、池本 真二. 保育園児への食育介入および保護者への教育介入の有効性に関する検討. 日本栄養士会雑誌. 53 (3). 246-251. 2010

内閣府共生社会政策統括官、第3次食育推進基本計画 (2016)、<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9929094/www8.cao.go.jp/syokuiku/about/plan/>、2016年12月1日引用

内閣府食育推進室・農林水産省、「食育に関する意識調査」について、<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9929094/www8.cao.go.jp/syokuiku/more/research/syokuiku.html>、2016年12月1日引用

中津井貴子、長坂、祐二. 食育に視点をおいた料理教室の教育プログラムに関する系統的文献レビュー. 山口県立大学学術情報 9 (17)、165-172、2016.3.

廣瀬 志保、上田 茂子、堀畑 薫、酒井 治子. 保育所の調理体験活動における衛生・安全マニュアルの検討 (1) —指導・実践計画書および行動観察の分析、細菌学的検討から一. 東京家政学院大学紀要. 52. 105-119. 2012-08-31

山口 静枝、春木 敏、原田 昭子. 母親の食行動パターンと幼児の食教育との関連. 栄養学雑誌 54 (2)、87-96、1996.4.

(受付日: 2016. 12. 10)